

聖書：ヨハネの黙示録 16：10～16

説教題：目を覚まして衣を着て

日時：2021年7月4日（朝拝）

先週から7つの鉢の幻を見始めています。7つの幻のシリーズとして、すでに7つの封印、また7つのラッパのさばきの幻を見て来ましたが、いずれもイエス・キリストの復活から再臨までの期間、どのようなことが世界の歴史に起こるかをヨハネに示したものです。この7つの鉢の幻は7つのシリーズの最後のものです。先週はその第1から第4の鉢までを見ました。この幻は、前に見た7つのラッパの幻と良く似ています。今日見る第5と第6の幻もそうです。

まず10節で第五の御使いが鉢の中身を獣の座に注ぎました。「獣」とは13章に出て来ましたが、悪魔の手下として悪魔に用いられる国家権力のことです。本来、政治権力は良い目的のもとに神が立ててくださった制度ですが、悪魔は神と神の民・教会を攻撃するために、この本来良いものを悪く用いるということが言われました。ヨハネの黙示録が書かれた当時は第11代ローマ皇帝ドミティアヌスがキリスト教会を激しく迫害していました。獣とは彼ばかりでなく、歴史の中に繰り返し現れるそのような政治権力あるいは政治的支配者を指します。その獣の座に、すなわちその支配の座に、神の怒りの鉢が注がれました。すると獣の王国は闇に覆われました。これは出エジプト記におけるエジプトへの第9の災害を思い起こさせます。あの時、モーセが天に向けて手を伸ばすと、エジプト全土は3日間、真っ暗闇となりました。ある意味で獣の支配はサタンの支配ですから、それ自身暗闇の支配と言えます。しかしこの神が送られたさばきとしての闇は全くの闇です。神の祝福が一切取り去られ、何の光もない状態。ここではまだ最後の状態には至っていませんが、永遠の暗闇の恐ろしさを垣間見させる状態です。人々はこの苦しみのために舌をかんだとあります。この第5の鉢のさばきは第5のラッパのさばきに対応します。9章3～6節にサソリが持っているような力を持ついなごが底知れぬ所から出て来て人々に害を与えると述べられていましたが、そのいなごはサソリが人を指した時のような苦痛を与えたと言われていました。そのために人々は死を切に願うほどになると。神から離れた生活に幸いはありません。人々はこのために絶望的な状態に至ります。

その彼らについて11節でさらに言われていることは、彼らは天の神を冒瀆すると

ということです。前回の9節も同じでした。本来、災いや苦しみにあつたら、自らを振り返って悔い改めるための特別のチャンスなのに、人々はそうしない。今日もそうです。色々な苦しみや災いを前にして人々はよく言います。神がいるなら、なぜこんなことをするのか。神は一体何をしているのか。神はひどい。そして、だから神などいるはずがない！とまで言います。普段神を無視して歩んでいる人たちが、何か問題が起こると神が悪いと文句をつけ、神を呪う。これでは救いはありません。私たちは自らも同じ道を行くことがないように、心を頑なにするのでなく、むしろ聖書が示す悔い改めという真の祝福の道こそを行く者とされたいと思います。

さて12節では第6の御使いが鉢の中身を大河ユーフラテスに注ぎます。これも第6のラッパのさばきに対応します。その時も述べましたようにユーフラテスは神の民に約束された土地の東の境界線となる川です。またこの黙示録が書かれた当時のローマ帝国の領土の東端でもありました。その川向うにはパルテヤ人が住んでいて、ローマにとってはいつこちらに襲いかかって来るか分からない恐ろしい存在でした。つまりこちら側の者にとってユーフラテスは、自分たちを外敵から守ってくれる自然の障壁でもあったのです。しかし第6の鉢のさばきによって、その水が涸れてしまいます。これによって日の上の方から来る王たち、すなわち東側にいる王たちがいつでも襲いかかることが可能になります。これは神がこの時までかけていた制限を取り去るということです。それによって害を加える者がいつでもこちらに入ってくるができる。もちろんここでユーフラテスは象徴的な意味で語られています。これは神がこの時までかけていた抑制の手綱を緩めることによって、害を与える敵がより自由に活動できる状態にされたということです。

この状態となったことを受けて、13節には竜と獣と偽預言者の口から蛙のような3つの汚れた霊が出て来たと記されます。竜とはサタンのこと、獣とは先に述べたようにサタンの手下として働くこの世の政治権力、そして偽預言者とは13章後半で見た通り、獣を拝むようにと人々に働きかけ、人々を惑わす獣のサポーター、宣伝者たちのことです。この竜と獣と偽預言者は、父・子・聖霊の三位一体をまねた悪の三位一体のようなものと以前に述べました。その彼らの口から出て来た3つの蛙のような霊は、14節に「しるしを行う悪霊どもの霊である」とあります。これは一体どういうことでしょうか。「口から出た」とは、この霊が人々に偽りの言葉で語りかけ、人々を惑わす霊であることを暗示します。また蛙はレビ記に汚れた動物として出て来ます。

蛙は絶えずゲコゲコ訳の分からない言葉で鳴いています。そのように絶えず叫び続け、空しい言葉を語り続ける霊であることを暗示します。その蛙のような汚れた悪霊は全世界の王たちのところへ行き、神と神の民と戦うために、彼らを召集します。その戦いが、最後 16 節に記されているハルマゲドンの戦いということになります。

このハルマゲドンという言葉は、おそらくクリスチャンでない人も聞いたことがあると思います。一般に世の終わりに起こる最終戦争を指すと理解されていると思います。ある意味でそれはその通りです。しかしこれはしばしば言われるように世界の大国間に生じる世界戦争を指すものではありません。また多くの人は、これが世界のどこで起きるかに関心を持ちがちです。ここに「ヘブル語でハルマゲドンと呼ばれる場所に」とあります。ヘブル語の「ハル」とは「山」のことで、「マゲドン」は「メギド」のこと。つまりこれは直訳すれば「メギドの山」となります。メギドとはこれまで神の民とその敵との戦いがなされてきた有名な合戦場です。たとえば士師記 5 章でデボラとバラクが神の力によってカナン人を撃破したのはこのメギドにおいてでした。あるいは反対に南ユダの善王ヨシヤがエジプトの王パロ・ネコに敗れ、やがてバビロン捕囚へとつながることとなった重要な戦いが行われた場所も、このメギドでした。このような歴史を背景として、「ハルマゲドン」すなわち「メギドの山」と語られれば、そこは再度と言うか最終的に神の民と神の敵との決戦が行われる場所だと人々が考えたであろうことは想像に難くありません。しかし先ほどのユーフラテスと同様、これも文字通り、実際のメギドで最終戦争が行われると読むべきではないと思います。それに「メギドの山」とありますが、メギドは平原にある町で、文字通り「メギドの山」はありません。ではなぜ「山」と言われているのかについて、色々な解釈がなされています。押さえるべきポイントは、竜、獣、偽預言者の悪の三位一体が働きかけて、神と神の民を滅ぼすために、世の国々を導いて最終的に挑む戦いがあるということです。まさに世の終わりの最終決戦です。悪魔が悪の力を結集して、最後に神とその民に挑む戦いです。今日の箇所はそのために王たちを「集めた」というところまでです。この戦いの内容また結果は、このあと記されることとなります。

今日はこのハルマゲドンの戦いを見据えつつ、最後に 2 つのメッセージに注目したいと思います。まず一つ目は神の主権のメッセージについてです。このハルマゲドンの戦いは、悪の三位一体が最後の力を結集して挑む戦いです。それは当然のことながら、神の民・教会にとって侮れる戦いではありません。この戦いはすでに見た 11 章 7

節と同じことを指していると考えられます。11章7節：「二人が証言を終えると、底知れぬ所から上って来る獣が、彼らと戦って勝ち、彼らを殺してしまう。」この証言する二人とは教会のことです。その宣教が終わりとなる歴史の最後の局面で獣が教会に勝ち、教会を殺してしまうと言われました。そのような厳しい状態に教会は置かれるのです。しかしこれらの出来事の上に主権を持っているのは彼らではありません。今日の16章12節に、この出来事は大河ユーフラテスが涸れたことに始まったことが記されていました。それをしたのは誰だったでしょう。それは神です！神がそこにあった制限を取り払い、悪の力が集まることを許されました。そしてこの戦いは14節で何と言われているでしょう。そこに「全能者なる神の大いなる日の戦い」と言われています。「竜の大いなる日の戦い」ではありません。あるいは「獣の大いなる日の戦い」ではありません。そうではなく、「神の大いなる日の戦い」、しかも「全能者なる神の大いなる日の戦い」です。神は旧約時代からやがて国々をさばく大いなる日を来たらせると語っておられました。ヨエル書2章11節：「主はご自分の軍隊の先頭に立って声をあげられる。その陣営は非常に大きく、主のこぼれを行う者は強い。主の日は偉大で、非常に恐ろしい。だれがこの日に耐えられるだろう。」ゼパニヤ書1章14節：「主の大いなる日は近い。それは近く、すぐにも来る。主の日に声がする。勇士の悲痛な叫び声が。」ですからこの第6の鉢のさばきで言われていることはこういうことになります。この世の王たちは、竜、獣、偽預言者の力の下で、神と神の民を打ち負かすために集まって来ます。しかしその日は神の大いなる日であり、神がご自身のさばきを明らかにする日です。彼らは神の民を打ち負かそうと自信満々で集まって来るのですが、実際は神によってまとめてさばかれるために集まって来る。ですから真の支配者は神です。このハルマゲドンの戦いにおいても、最も高いところで主権をもって導いておられるは神であると言われているのです。

そしてもう一つのメッセージは、この全能者なる神の大いなる日のさばきはキリストの再臨を通してなされるということです。そのことが15節に示されています。どうやって神の民が悪の力が結集するハルマゲドンの戦いにおいて救い出されるかと言えば、それはキリストの来臨を通してです。子羊キリストが勝利を与えて下さるのです。その様子がこの後の17章14節、19章11～21節、あるいは20章7～10節で語られます。こうして民は救われるのです。

ですから大事なことは、主が来られる再臨の日に私たちはどういう状態にあるかと

ということです。15 節にあるように、裸で歩き回って、恥ずかしい姿を人々に見られることになるのか。これは準備していない状況で、思わぬ時にこのことが起こり、慌てて起き上がって外に飛び出し、裸のような状態であることを描いたものでしょう。着るべきものを着ないで外に駆け出して行って、恥ずかしい思いをする。そうではなく「目を覚まして衣を着ている者は幸いです」と言われています。これは主がいつ来られても良いように準備している人のことです。具体的に言えば、主の再臨を待ち望んで主に従う信仰生活を続けていることです。困難の中でも獣を決して拝まない。また偶像礼拝をしない。またこの世の祝福を得るために信仰的に妥協する道を行かない。厳しい中でも忍耐をもって主にのみ従う歩みをすることです。この 15 節は信者を脅すためではなく、ハルマゲドンの戦いを前にして、信者の励ましとなるように意図して語られた言葉です。最後の日にかけて厳しい戦いの日が訪れます。しかしあなたがたはこの信仰に立ち、この希望に支えられて、主に忠実な歩みに励むように！と激励するための言葉です。

ここに「わたしは盗人のように来る」とあります。油断している者にとって、その日は突然来る。予想もしない時にそのことが起こり、激しいショックを受ける。ですから私たちは全世界を巻き込む戦争は今起こっていないから、主の日はまだ来ないなどと考えることはできません。先に述べましたように、ハルマゲドンの戦いとは、世界的な国々の戦争のことではなく、神と神の民に対するサタンとそれにつく者たちの戦いです。どういう形でそれが起こるかは私たちに言い当てることはできません。いやもしかすると、それはすでに始まっているかもしれません。私たちはその戦いのただ中にいるのかもしれません。そして主は盗人のようについに来られるかもしれない。私たちは準備ができていますでしょうか。

世の終わりにかけて悪は力を結集して総攻撃をかけて来ます。信仰者はその中で信仰を後回しにするようにとのプレッシャーと誘惑のただ中に置かれます。この苦しい状況では多少信仰において妥協するのもやむを得ないのではないか。そうしないとこの世で生きて行けなくなるのではないか。心で拝まなければ、形だけ獣を拜んでも問題ないのではないか。今この危急の時はしばらく世と一緒に道を行く方が良いのではないか、と。しかしそういう厳しい戦いのただ中でイエス様は来てくださり、ご自身の民を最終的救いへと導いてくださいます。だからそのことを見上げて、「目を覚まして衣を着て」いる者であるように！と今日の御言葉は語っています。この信仰と希望

に生きて、喜びをもって再臨の主が与えてくださる大いなる勝利と救いにあずかる者となるように！その日を見つめてなお忍耐と信仰の道を進むように！と今日の御言葉は励ましてくれているのです。